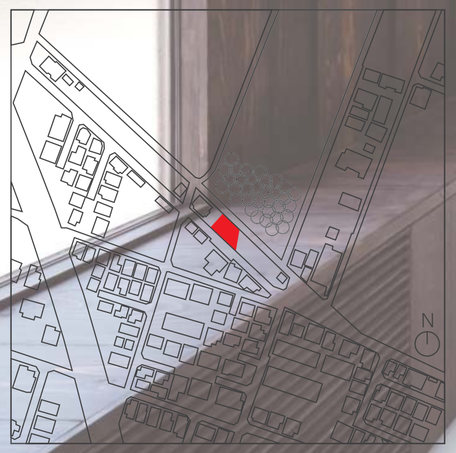
バウンダリー・ハウス

この敷地は市街化調整区域内にある。通常は建築が不可能な場所であるが、既得権があるゆえに存在し得る。住宅地と農地の間にある敷地、都市と地方の間にある敷地、様々な状況が宙吊りになったような敷地（日本中どこでもあるような新興住宅地）で何をやれるかを考えた。そこで導き出した答えは、都市型の建築を押しつけるのではなく、以前はこの地域が自然と密接に関係していたことを踏まえ、建築が自然に寄り添うことを心がけた。そのことを現実化するために、人間の五感を刺激し、「自然と建築の境界の曖昧さ」を感じることが出来る空間を目指した。
プランが迷路のようになっているのは、内部が外部を取り込むためのものである。室内外に設けたトップライトや植栽が建築の境界を曖昧にし、住む人の気持ちを開放的にしてゆく。

配置図　S=1:2500



外観：外壁には焼杉を磨き使用した

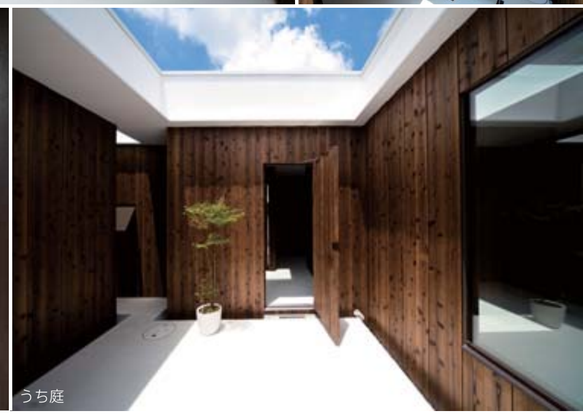
そと庭

リビング･ダイニング：内部は紅殻入りの柿渋による塗装

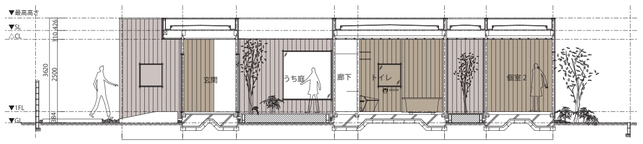
屋上：16のトップライトを設けた

うち庭：内部のような外部空間

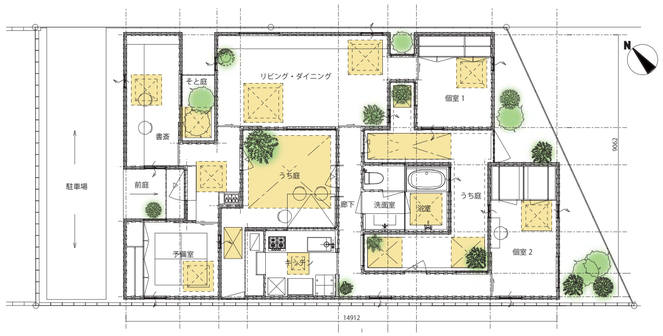
書斎


うち庭

断面図　S=1:150

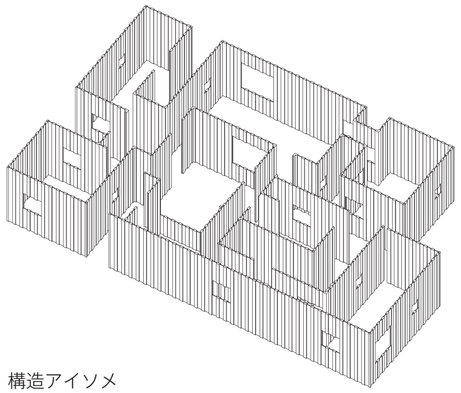


1 階平面図　S=1:150



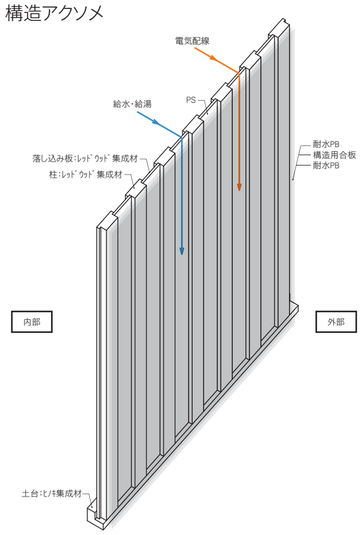
平面計画

迷路のような空間の内部と外部に同じようなディテールの開口のトップライトを１６箇所設け、ガラスの存在だけが内外を分けている。また、鉢植えされた合計７つの同じような緑を内外に置くことで内部と外部、自然と建築の境界を曖昧にすることを考えた。



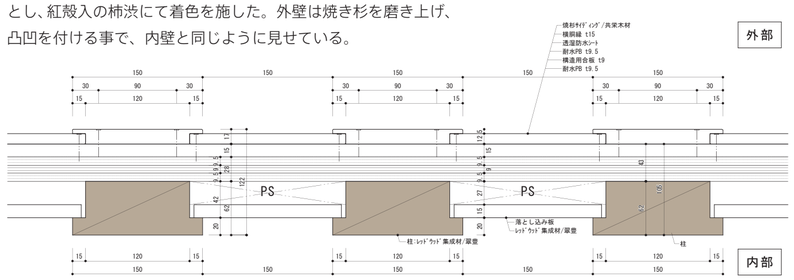
構造アイソメ

構造アクソメ



凸凹の構造材

内壁は 62 ミリの厚みを持つ集成材を凸凹に組み合わせて構造材とし、紅殻入の柿渋にて着色を施した。外壁は焼き杉を磨き上げ、凸凹を付ける事で、内壁と同じように見せている。



構法

通常の軸組構法とは異なるシステムで凸型の集成材柱を 300mmピッチで格子状に立てている。
また、凸凹の裏にできるスペースを配管・電気配線に利用している。